住宅は叫ぶ／覚書

神代雄一郎

昨日，青山の建築家のクラブに用事があって，汗をポタポタたらしながら歩いていたら，ふと荒々しい打放しコンクリート肌が眼に入って，足をとめた．東孝光さんの塔状住宅の足元に立っていたのである．自然に眼が上方に向かって，驚いた．もう塔状ではないのである．

3年まえ，アメリカの若い評論家といっしょに，向かいの歩道からこの塔状住宅を見やったときのことが，思い出された．「気に入った，おれはこれをニューヨークでやってみよう」と彼はいって，大変喜んだ．たしかに塔状住宅は，さっそうと細くそそりたって，塔状だった．だが昨日見た同じ塔状住宅は，もはやまわりに同じくらいの高さの建物が建ちならんで，間口の狭い，貧相な姿にしかみえなかったのである．

たった3年で．私は塔状住宅のことあげには感服していたから，何度かこの住宅について，好意的な発言をした．それだけに，たった3年後に，都市の中に埋れ込んでしまった塔状住宅をみるのは，いたましい気がした．おそらくこれが建ったころは，前面の環状4号道路は両側の家々をけずり取って，抜けできたばかりで，道に面する建物はまだ姿をなしていなかったのだろう．そのころいち早く塔状住宅は建てられたわけだろうが，その後，街路に面してビルだのスナックだのが建ちならび，塔状住宅は，3年間叫び，そして終った．

私は数日前に，車にのせてもらい，最近できあがった数軒の独立住宅を見てまわった．その他にも，写真をみせてもらったものもある．それらは，塔状住宅や，鈴木恂さんの泡沫単位をもつ住空間や，林泰義さんの起爆空間や，原広司さんの有孔体の住宅や，六角正広さんの自邸や，竹山実さんの住宅作品などと，どこか共通なものを感じさせるものであった．その共通なものとは，住宅設計の発想が，約半世紀をかけて私たちの先輩が築いてきた，いわば機能主義的なプランニングと，まったく違っているということである．

文明が大きな転換期を迎え，古い体制がゆらぎはじめているとき，こうした新しい動きが，それこそまさに泡沫のように，ブクブクと浮びでてくるのは，歴史の必然であろう．だからこそ，私はこうした作品に注目もし，好意ももっているわけだが，そしてそれらが，決して静かに浮んでくるのではなく，叫びながら生まれてくるのも当然と思うのだが，しかしその主張が，3年ぐらいで消えてしまうのを見るのは，悲しい．悲しいというよりは，こちらが気抜けしてしまうので，やはり建築というものは，1年や2年ですりきれてしまう衣服とは違うように思う．

だがその辺が，しかしこれらの新しい住宅の新しさを支えている，かつての，理づめの半世紀の努力を積重ねてきた住宅設計とは違うところで，住宅建築とはファッションであるとか，あるいはフ

ァッション・アーキテクチュアという新しい言葉で，自己の立場を説明することにもなるのだろう．塔状住宅の第1号は，路面建築の中に埋れてしまったけれども，それはまたそれで，第2，第3の塔状住宅を都市の中の，別のところに建てればいいわけだろうし，それらがまた，3年ぐらいで塔状性を失ってしまっても，いいのかもしれない．そして，塔状がファッション性を失ったなら，また別のファッションを打ちたてればいいのだと，考えているのだろうと思う．

つまりこの新しい波に属する作家たちは，かつての，いわゆる機能で建物をつくるという立場とは，まったく違った論理に立っているので，ファッションといってしまうのは，あるいはあまりに問題を軽薄にかたづけてしまうことになるので，うまくないのかもしれない．別の，もっとよいいい方をすれば，直接人間の感覚とかかわるようなところから，住空間を発想しているのだということになろう．ファッションみたいなところもあるし，事実，きわめてファッション的な建築もつくっているが，それでもどこかに，きわめて人間の情念を根本的にゆするようなものをもっていて，それが私も含めて，多くの人びとを，とにかく引きつけるのだろう．

かつてのような論理はまったくない．そのかわりに，きわめて触覚的であったり，強烈な光や色の劇的効果があったりする．そういう，人間ならだれでもがもっている驚きのようなものを誘い出すような仕組みをもっている．それが住宅建築としていいのかどうかは知らないが，住宅という場で，とにかく人間にぴったりくっついた，人間のまぎれもない情念だけにたよって再出発しようとしていることはわかる．

住宅設計の新しい波への同情と不満

住宅設計の新しい波は，東さんの塔状住宅や，林さんの起爆空間が先頭になって，ジャーナリズムに登場してきたから，何か現在の都市の状況と，きわめて関係深い状態で生まれでてきたものだと考えられがちである．そして私自身も．そんなふうにみていた．だがその発想は，決して直接都市とかかわったものではなく，むしろきわめて人間に密着してでてきたものであることを，今度私は改めて理解した．だから最初に書いたような，塔状住宅が塔状でなくなったということも，実はたいした問題ではないのかもしれない．都市環境は，いまやそれほど住宅に対して破壊的なのであって，住宅建築はここで問題にしているような新しいものでも，決して破壊されないではいられないのである．

新しい住宅――ここで問題にしているような新しい住宅作品は，しかし大変強く，そうした都市環境のなかで自衛を叫んでいるのは事実である．都市のなかにいて都市から自らを守り，そこでぎりぎり人間を人間らしく再生させてやろうとしていることも事実である．そういう意味では，都市とたしかにかかわっているのだが，それで都市の中の独立住宅のああ方を，型をつくり出してやろうというものではない．簡単にいってしまえば，反都市的に，都市と対応しているわけである．もっといってしまえば，都市と断絶した人間的な空間を，つくろうとしているのだろう．そうした断絶を意識的に設定しないと，もう都市のなかで住宅をつくるということは，立場として存在し得なくなっているのである．したがって，これらの住宅に等しくみられる傾向は，密室的だということである．それは6坪の敷地に建った塔状住宅に象徴的だが，私たちは広大な敷地など夢想することさえできない．狭い敷地に――それだって可能な限りに金を投じて獲得されたものだが，そこに家を建てるとなると，従来のように壁面にきれいに規格的な窓をあけても日照は得られないし，隣からまるみえになるのは知れたことである．たとえ建てているいまはそうでなくても，すぐそうなるのは知れている．密室化の傾向が生まれ，トップライトが採用される．だがこう考えるのも，実は私が従来のプランニングの論理から推移させていっているので，実は新しい作家たちは，もちろんそんな状況は知っての上で，人間を原点において，そうしたかたちをつくっているわけである．

全体の住空間が，何となく一様に明るい，なまぬるい明るさではなく，密室的な暗さに対して，まばゆいばかりの光のふりそそぎを，やはり意識的につくってゆく．それにはトップライトが効果的だし，暗い厚い壁に対して，軽快で明るいガラスにかこまれた水泡空間も必要なのである．そうやって，人間に人間らしい情念の起伏や抑揚を回復させるのだというのが主張するところで，一見都市環境とのかかわりから生まれたと思われる，まことに唐突な開口の存在は，実は反都市的な，人間的なものなのである．

だが，私はいま，新たに光化学スモッグとか，オキシダントという名前で襲ってきた都市公害が数日もつづこうという暑さのなかで，もうまとまった論理も展開し得ないような頭の状態で，この原稿を書き，だから一種の覚書のつもりで，断片的に書きつらねていくよりしかたないのだが，こうした密室や開口の特性をもって自衛を叫ぶ住宅，その人間的な意味は認めながらも，その叫ぶ姿――というのは主としてその外観についてのことだが，それにはまた人間的に，本質的に，納得がいかないところがある．

というのは，私には，やはりこれらの住宅が都市から断絶したといいながら，実はその外観の姿で，都市に迎合しているようにみえるのである．ギクギクとした屋根は，やはり都市にアンテナを出しているのであり，ファッションは元来都市的なものであり，人間破壊的な都市環境にこびを送っているようにみえる．もし，あのはげしい凹凸のなかに空気の完全な浄化装置でも装備されて

SECOND FLOOR

FIRST FLOOR

Ordinary Architecture Venturi & Rauch

上：起爆空間　林泰義
中：水泡空間　鈴木梅
下：ギャラリーのある家　竹山家

上：塔状住居　東孝光
下：伊藤邸　原広司

いるのであれば，私の考えはかわるかもしれない．だが，叫ぶようにみえる外観の内側には，意外と古典的な機能の断片が収容されているだけなのであり，結局はファッションなのである．
とにかく，都市との関係という点からみれば，新しいこれらの住宅は，意外と甘いものなのである．都市と断絶するという立場，そしてそうしないと，いま住宅建築の創造の立場はないという論理，そうした都市との関係を私は認める．だのに，それがまっとうされないで，結局はその叫びが都市の喧騒といっしょになってしまいそうなところに，私は不満を覚える．

中心性の回復

こうした住宅には，論理がないといわれる．少なくとも，これまでの住宅とは，ぜんぜん論理が違うと主張される．だが，そうでもないという気がしている．ひとつ，かなり共通して，これらの新しい住宅にみられる論理は，中心性の回復ということだろう．
塔状とか起爆とか有孔体とか泡沫とか……，面白い言葉が使われているが，そしてこうした言葉の使い方に，私は暴力のようなものを感じるが，きわめて日本の建築家的な，不可解な言葉の使い方のかげにかくれて，中心性の回復といった論理が，実体として存在しているのは面白いことである．
中心性の喪失が，現代芸術の特色であるのを指摘したのはゼーデルマイヤだが，新しい住宅の動きが，中心性の回復という，あるいは中心性の獲得という，ある意味ではきわめて古典的な傾向をもって実現していることは注目すべきである．それは別に何も新しいことではないので，茶の間とか居間とかリビングルームというものが，中心に設定されていることである．Ｌが中心になっているということである．それは２ＤＫとか３ＤＫとかが全盛で，なかなかＬの字が入らなかった，ベッド・タウンの無数の住宅に反抗しているのか，その辺はよくわからないが，とにかくリビングルームとからんで，デザインの中心性が強くうたわれていることは，認めないわけにはゆくまい．
リビングルームが中心にあって，そこへ吹抜けや光が集中されて，まわりに付属的に，台所や書斎や寝室を勝手気ままにとりつけるという論理である．あるいはリビングルームに向かって，都市などのアプローチを含めて，強い中心軸性を付与しようといった論理である．塔状住宅のようなものも，あれは見ようによっては，鉛筆のような細い，上方に向かう裸の中心軸だけなのだとも解釈することができよう．
こういう中心性や中心軸性の設定は，古典的で，新しい住宅作品にそんなものを発見するのはちょっとおかしい気もしようが，実はこれがでてくるのは，やはりこうした住宅設計が，先にも述べたように，まず人間の，人間中心の立場からつくられていることに起因しているわけである．これはたしかに，西欧の住宅の考え方としては古典的であり，一般的なのだけれども，それが実際の住宅作品でどんなふうに実現されたかというと，とりたてては表現されなかった．リビングルームがあり，それは住宅の中心としては使われたが，つまりそこで家族が集まり，夜な夜なパーティがもたれたけれども，もう半分，プライベートな個室や寝室群というものがあって，住宅は両者の釣合いとして設計されてきた．
日本の場合は，一般的には，客間中心，ザシキ中心の封建性の強い間取りがあり，それが崩壊していく過程であり，リビングルームと客間をかねた空間が，上層階級の住宅では実現していったけれども，結局そうしたリビング中心の型が一般化する前に，戦争が住宅の質を低下させ，やっと食寝分離を守ったような程度で，小さい２ＤＫ・３ＤＫといったＬぬきのプランを一般化していった．だからいま，住宅作品のなかで改めて中心性を強く打ち出していくこれら新住宅に，私は拍手をおくるわけである．
だが，敷地も狭く，住宅も小さい現実のなかで，強く中心性を打出せば打出すほど，当然，それは寝室の他のものを従属的にし矮小化し，グロテスクなほどに，中心性だけを露呈する結果になる完全に，機能主義的プランニングのバランスは破壊され，あるときはきわめて古典的にさえ感じられるものが，アナクロニズムな姿で露出してくる．林さんの起爆空間の，あの立方体全体に，私はそんな感じを受けるし，六角さんや，山下司さんの作品の軸性にも，私はそんなものを感じる．
だからこそ，しかしこれらの住宅は，ピアノもカラーテレビも……というマイホーム主義を，何もかも無秩序に集めこもうという，雑多な集積主義を，打ち破る力になり得るわけである．チマチマと積木細工のように，小さなものがたくさん，客間も書斎もピアノ室も……というように仕切られ区切られて，なるほどあれもこれもあるというのではなくて，中心にどかんと大きなものがあること，それが人間本来の，いわば古典的な強さで存在すること，そういうものをつくる論理を発見すること，そういう立場は，たしかにこれら新住宅の作者には存在する．それがいま未熟であろうと，あるいは肩をいからせていようと，いずれは作家たちの人間的な成長・成熟によって，自然にもっと落着いたものに変わっていくだろうから，それをとりたてて心配したり嫌ったりすることはなかろう．

未消化なデザイン

むしろ気になるのは，これらの作品の，先にもふれたような，外観の特性だろう．それをベンチュリィやムーアの模倣とか，同時現象という人もあり，私もそんなふうに書いたことがある．片流れに，ストンストンと切った，庇のない屋根で示されるその特徴を，私はそうきらいではない．こういう形がないと，空間にひびきを与えないし，つまりは叫べないわけだから．方向性をもった直線の屈折というのは，こういうふうに使われると，単純で軽快で，光線の屈折のような，イナヅマのような，こころよさがあるそれはまあ，模倣でも同時現象でもいいだろう．
問題なのは，やはり日本でこの形をみると，とくに日本の都市のなかでの形をみると，それがアメリカの海浜や草原でみるのとはちがって，甘ったるくみえることである．きびしさが感じられないということである．屋根ほど，その地域の風土を直接に反映するものはないわけなのだが，その辺がうまく消化されていないところに，甘くみられてしまう原因があるのだろう．雨もりがするということを聞いたが，日本の豪雨や台風に，この屋根がうまく対応しているとは考えられない．
だが雨もりなどという小さなことよりも，もっと大きく，これらの住宅の形が，日本という地域を感じさせないというところに，やはり問題にすべきものがあるのだろう．これらの住宅作品が，日本の様式とはまったく無縁であるということ，それはまた，こうした動きの，主張の，当然なあらわれではあるわけだが，日本といわないまでも，地域の風土条件といったものは，もう完全にかえりみないでいいものなのかどうか．都市性というものは，そしてそこを流れるファッションというものは，いまや強い同時性をもって表現されていて，その力は，風土性とか地域性を越えきった，おさえきったものなのか．ファッションに国境がなく，ヒッピーに政府がないように，建築もまた，完全に地域性を問題にしなくて成立ち得るものなのかどうか．そうしたものを手がかりにしないで，人間に密着し得るのか．人間の情念にかかわり得るのか．
これらの住宅のなかには，畳が使われている場合がある．それは，施主のたっての要求の結果であったり，老人のためのものであったりする．いわば畳は，これらの作者にとっては，もし使わないですむのであれば，消去してしまいたい材料なのだが，しかたなく使われている．だがいったん使われてしまうと，私たちはそこに日本の様式を見てしまう．様式を感じさせないほどに，つまりひとつのただの建築素材として畳をつかい切るためには，逆にもっと畳をたくさんつかうか――かつての丹下邸のように，あるいは清家清さんや篠原一男さんがやるように，１枚か２枚使うという，やり方しかないだろう．そのへんが，この作者たちは地域性をこえたかにみえながら，やっぱり大変甘く畳に負けているのである．
私は日本の様式を守れなどといっているのではない．そしてこの住宅作家たちも，日本の様式に対しては，断片的にしか，部分的にしか興味を示していないようだ．そしてそれが，この新しい波

上：丹下自邸　丹下健三
下：清家自邸　清家清

の魅力であり主張なのだが，そしてあれだけ叫ぶような姿勢をとっていながら，畳という断片が入ってくると，その断片を，自分の主張のなかで消化することができない．消化して象徴化することができない．

もう少しきびしくいってしまえば，自己の主張，自己のファッションを強く打出すための，マテリアルが案外貧しいし，そのマテリアルを象徴化してゆく力が弱いのである．姿勢は強いのだが，創造のための材料や手法が貧しく弱いために，古典の断片ではなく古典様式の残滓が顔を出してしまうのである．新しい創造であるはずのものが，模倣なり同時現象に止ってしまうのである．

私はムーアさんの，あの内部空間に据えた，4本柱で支えられた，盆踊りの太鼓台のような，祭の神楽の屋台のようなものに，そして前方に後方にと，鋭く切り落された屋根に，人間の心の底をゆするようなものを感じるけれども，日本の同時現象には，そうした感動を受けない．それはやはり，地域の風土や文化に根ざしているかどうかの違いからくるものなのではないだろうか．

ヒッピーだって，数珠をネックレスのかわりに使ったり，大きな絞り文様のシャツを着ているのに，建築家のヒッピーを自称をするこれらの若い作家たちが，どうしてアメリカやイギリスのヒッピーになろうとするのだろうか．ヒッピーだから日本の数珠，日本の絞りであってはいけないのだが，自分の地域のなかからも，文化の様式をこえて，断片化した無国籍のものを見つけだす眼，それを使いこむ力は，あっていいように思う．

世代の差

ところで，これらの住宅の作家たちが，そろって35歳ぐらいの年齢だということも，またこれらの作品特性に近づくひとつの手がかりになるだろう．35歳という年齢は，終戦を10歳で迎えたということを示している．朝鮮事変後の好景気のはじまりとともに，新しい学制によって専門教育を受けた人たちである．日本が国際的存在になりはじめ，あるいはもっとも無国籍的様相を呈した時期である．日本の専門教育にあきたらない人たちは，自由に国外へでていった．日本からドロップ・アウトし得る，おそらく最初の条件下に成長したのが，この世代の人たちであったと考えられる．

たしかに，この新しい住宅の作家たちのなかには，日本の大学を出てから，アメリカなどの大学でゆっくり勉強してきた人たちが多い．その場合，彼らの外遊は，半世紀前，まったく近代建築のない日本で分離派運動をはじめて，ワイマールのバウハウスやオランダのデ・スティルやアムステルダム派，ドイツの表現派などを偵察したり，それらと連絡をとったりしヨーロッパへ渡った堀口捨己さんの立場と，まったく違っている．また，日本の大学をでてすぐに，ル・コルビュジェのもとに，シベリヤ鉄道ででかけていった前川国男さんとも違う．そして，日本で地位を固めたのちに，各国へ出かけていった丹下健三さんとも違う．そして，戦後まっさきに，ハーバート大学の大学院学生になった芦原義信さんとも違う．その違いは何かというと．この人たちには，否定的にであれ肯定的にであれ，とにかく日本があり，ヨーロッパがあり，世界があったわけなのだが，この新しい作家たちには，そうした日本も，ヨーロッパも，世界もなさそうなのである．もっとひどくいってしまえば，歴史も文化も，そんなに強く意識する必要なしに育ってしまったように見えるのである．

これは私の錯覚かもしれない．かもしれないが，それが悪いといっているわけではない．これはそうなったので，どうもしようのないことなのだ．林さんがいわれるように，「ぼくらはやっぱりもう生まれてきた状況も何も違う」のだ．それでいいので，そうひらきなおらなければ，何もつくれるものではない．未熟であろうと，主張しなければならない．私自身も，かなり無政府主義的な傾向の強い男だから，日本なり世界なりが，体制的に私にかかわってくると反発しないではいられないわけだが，かといって，日本人であるということは，どうしようもない原点として，私自身のなかにある．

夜半を過ぎたのに，どうもちっとも涼しくならない．暑いので話は変な方向に流れていってしまって，焦点を結ばないでこまるが，日本とかアメリカとか世界とかを背負ったり，意識したりしないで，この新しい住宅作家たちのように，人間の内部から出発して建築をつくろうとする場合，やっぱりまず第一に，建築をはなれて，建築という体制から身をふりほどいて，自己という人間をきびしく鍛練したり，自分という人間に深く沈潜する必要があるのではなかろうか．それでないと，主張は甘くなり――先に私が暴力的なものを感じる不可解な言葉といったものは，まさにこの甘さの裏がえしになった表現であり――，様式を破壊しつくすことは望めない．まず自分の顔をつくること．

私には，この新しい住宅の作者たちが目指しているものは，白井晟一さんの世界とずい分近しいものに思われるのだが――それだからこそ，白井さんは現在たくさんの賞を獲得し，ジャーナリズムがとびつき，若者に人気があり，ブームにのった様相を呈してしまったわけだろうが――，その白井さんについて，私に建築界では珍しいヒッピー的存在だと書いたことがあり，それを読まれた白井さんが，老ヒッピーといわれたといいかえされたことがあったが，協会にも学会にも属さず，まったく自分の完成だけをたよりに生きて，自然秀れた作品をつくってゆくという，それが本当のヒッピーだろう．このヒッピー性が，いま問題にしている作家たちにはたしかにあり，それが私にとってはひとつの魅力なの

だが，だがそのヒッピー性が，まだ薄く弱いのである．
それは建築家にとっては，大変につらいことであると思う．何故なら，建築をつくるということ自体，反ヒッピー的な要素をもっているからである．白井さんの自分の家には，長いこと便所がなかったというのは，有名な話である．自分のための完全な住宅をつくるということは，ヒッピーを放棄することだろう．だから，これらの新しい住宅作品には，完成されたという感じがないのだろうか．ことさらに未完成を露呈しているのだろうか．そうした論理もなりたたないではない．だがそう見るのは，あまりにうがちすぎているように思われる．

思いきり叫べ

こういう住宅に住んで，施主はどんな気持でいるだろうか．作家の意図，人間の本質的な深い情念にふれようとする試みが，うまく住人に反応しているだろうか．そういうことが，実は私が住宅をみてまわった時に，いちばん知りたかったことであった．しかしこれほど，建築家とは一体何をすべきなのかと考えさせられてしまったほど，これらの住宅に対する住人の反応はまちまちであった　作家たちが意図した建築と人間との対応——触覚的とか情念とか驚きとか，そういった言葉で表現された人間的なものとのかかわり，それは一体，本当に住人との間に結ばれてくるものなのだろうか．
ある作家については，その作品をつくってから，まるで注文がなくなったといううわさをきいた．これなどはまったくそうした人間と建築の対応に折合いのつかなかった例であろう．満足していると住人はいわれたけれど，どうも私のみたところでは借りてきた猫のように，おとなしく耐えていられるように見受けられた場合もあった．また，この人は，まったく別の主張をもった作品のなかに住んでも，いまと同じように，まったく作者の意図とはかわりなく暮されるだろうと，そう確信できそうにふるまっている施主もあった．
これは一体どういうことだろうか．機能的に欠陥があって，雨がもるとか，使いにくいとか，そういう施主の苦情は，機能主義的な在来の住宅の場合と同じように発生するだろう．それはそれとして，作者が第一に意図したもの，人間精神とのかかわりが，まったく折合わない場合と，また他方ではまったく無視される場合と，そんなにも幅ひろく結果が出てくるということ，これは一体どういうことだろうか．これらの，新しい住宅の設計者たちがやろうとしていることは，思いあがりもいいとこだということになるのだろうか．建築家の職能の重心とは，一体いまどこにおかれるべきなのだろうか．
実はこれも，そんなに心配すべきことではないのだろう．というのは，こうした新しい住宅の大半は，建築家の自邸であるからであり，その自邸の中では，当の建築家が，いちばんぴったりと対応して住んでいたからである．建築家はみんな，思いきり自分の主張をこめて，自分の住宅を建てたらいい．それは第3者がみても，いたって気持のいいことだ．そういうことを気楽に，思いきりよくやれるのが，この世代の特色だといえるだろう．思いきり叫んだらいい．そして，それがポスターになって，注文がくれば，ファッションだといっていたものが，実はしだいに本当に定着していくようになるのかもしれない．現にそのきざしはある，と私はみている．
今度見てまわったなかでは，私は小野正弘さんの設計した自邸に，感心した．これを，いままで述べてきたような，まったく新しい波だちのなかのひとつとして見ていいのかどうか，私自身はっきりしないのだが，というはの，ここにはきわだった技術的な完成度があり，それは決してすべて新しいものではないが，しかしプランニングの組立ては新しくて，トップライトをもった吹抜けの中心部が設定されて，それがまたムーア風の外形をすなおにつくり出していて，とくに叫んでいるといったものではない．私は槇文彦さんのところで設計した代官山のアパートが好きで，何度もあそこへ食事に行った．あのアパートに住みたくなって，値段まで聞いたのだが，それはとても私の経済とは折合わなかったからあきらめたが，あのアパートの空間構成を，小野さんの住宅で再発見したおもいがした．うかがってみたら，小野さんはあのアパートのときの担当者だったそうで，なるほどそれならあたりまえと思ったことだが，とにかくこれなら，このように定着してゆくわけで，現にまた隣の家も，小野さんの設計で，同じような主張でつくられている．
木村誠之助さんも，同じサーキュレーション・システムの，次の作品図面を見せて下さったし，こうして住宅の新しい波もしだいに定着し，ひろまって行くようにみえる．それは結構なことで，大いに叫びつづけて欲しいものだが，そして，小野さんも，山下さんも，木村さんも，小沢照夫さんも，私の会った作家たちは，みんなむしろ寡黙で，自己主張を言葉で叫ぶようなことはなかったけれども，こうした新しい住宅の作家たちには，施主にも，私のような評論家にも，とてもわかりにくい，先に暴力的といったような言葉をつかうくせがあるのはどうしたことだろうか．泡沫や有孔体はともかくとしても，メガ・スペースという小さな空間にぶつかったりすると，まったく困惑してしまう．作品が未熟で，物では十分叫けべないから，言葉で叫ぶのかもしれないけれど，これは，かえって住宅の新しい波が，社会に定着してゆくさまたげになるだろう．実は作品のほうも，けたたましく叫ばなくなった時に，本当に社会に定着してゆくのだろうが．